



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第48回 日本語教育方法研究会

宮城教育大学（宮城県仙台市）

2017年3月18日（土）

3月18日に宮城教育大学と共催で第48回研究会を開催いたします。震災後、初の東北での開催となります。今回は、被災地である南三陸町の日本語教室の再開に仲間とともに尽力された佐藤金枝さんに御講演をいただきます。震災を通じて日本語教育にできることは何なのかを問い続ける機会としていただければと思います。また、今回も昼食交流会を開催します。1日を通して自由楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第48回研究会開催について

日時：	2017年3月18日（土）
会場：	宮城教育大学
開催委員：	高橋亜紀子（宮城教育大学） 小河原義朗（事務局：北海道大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:40	講演 「日本語教育にできることー南三 陸町日本語教室の再開を通して」 佐藤金枝氏(南三陸町日本語教室)
10:00	開会の挨拶	2:25	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	3:25	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:55	ポスターセッション終了
11:10	ポスターセッション開始	5:00	講評・JLEM 賞発表
12:40	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付		次回開催委員挨拶
12:45	昼食交流会（～1:30）		閉会の挨拶 参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入（p.14 参照）にご協力ください。

新規入会：3,000 円（年会費）

当日のみ参加：2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 日本語学習者と日本語母語話者のチャット会話分析

澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）

スマートフォンの普及により、日本語学習者は様々なコミュニケーションツールを使用し日本語母語話者と繋がり、日本語で会話を交わしている。中でもインスタントメッセージ（IM）アプリは、文字を使ってリアルタイムでやり取りができるだけでなく、絵文字やスタンプ、写真の送受信ができるという利点からその利用者が年々増加している。本研究では来日まもない韓国人日本語学習者と日本語母語話者との1年間に渡るオンライン上でのやり取りを分析し、学習者が教室外でどのように日本語母語話者と関係を構築し、日本語を使用しているのか、その実態を明らかにする。

2. 理工系留学生のための数学の基礎的専門語

小宮千鶴子（早稲田大学大学院）

数学は理工系学部では1年次から必修とされ、留学生にも入学前に高校卒業程度の数学用語の習得が期待されているが、学習語彙に関する研究は少ない。本発表では、理工系留学生のための数学用語の学習語彙として、数学の、中学教科書18種と高校教科書72種を資料に、異なり語数1027語から選定した基礎的専門語328語に関して報告する。328語のうち1級語彙は「確率、座標」など44語（13.4%）で、約87%が一般日本語教育では未習の語だった。中学教科書からは「関数、不等号」など171語（52.1%）が選定され、中学用語の重要性が確認された。328語には伝統的な漢語の用語が259語（89.3%）含まれ、その多くが「常用対数、置換積分法」など長い漢語だった。

3. iOS端末で動く独習用シャドーイングアプリの開発

竹内明弘・食品さやか（国際大学）

本発表は、タブレットやスマホ（iOSのみ、無料）でシャドーイングが独習できるように開発されたアプリを紹介する。特徴は、1）シャドーイング未経験者でもわかる練習方法の種類の説明とデモ動画がある、2）初中上級に渡って文字表記付きモデル音声があり、広範なレベルの学習者に対応できる、3）モデル音声と学習者の録音音声と共にピッチ曲線に変換表示され、自分のパフォーマンスを視覚的、聴覚的に確認できる、4）モデル音声の0.7倍速、区切り有り、テキスト非表示などの設定変更ができる、5）LMSを介して、音声ファイルの提出、テキストによる教師と学習者のコメントや気づきのやりとりができることである。

4. 大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか

中村かおり（拓殖大学）・近藤裕子（大正大学）・向井留実子（東京大学）

アカデミック・ライティングにおける引用指導では、多くの場合、原文をそのまま引用する直接引用と、要約して引用する間接引用があると紹介されるが、実際の論文では間接引用が用いられる傾向が強く、その方法も要約だけとは限らない。しかし、初年次の学生の作成したレポートには、直接引用が多用され、間接引用も原文を単に短縮させるだけの、文脈に沿わない内容になっていることが少なくない。本発表では、引用を広く外部の情報を取り込む形態と捉え、学生へのレポート作成指導において、論文とは異なるレポートという形式の特質を踏まえつつ、形態の異なる引用方式をどのように扱う必要があるか、学生の誤用例の分析をもとに検討する。

5. 「小さい」「大きい」を中心とした基本形容詞の類義関係コーパスを用いた分析を通してー

高原真理（岡山大学）

日本語学習者が初級で学ぶ基本的な形容詞（以下「基本形容詞」と呼ぶ）について、中級・上級となっても十分な習得がみられない背景に、基本形容詞の多義性による使用範囲の広さと類義語の使い分けの難しさという問題がある。しかし、類義関係のある基本形容詞の使い分けにまで言及した辞書は管見の限り見当たらず、記述のために必要な基本形容詞の類義語研究も十分にはなされていない。そこで本研究では、類義関係にある基本形容詞を明らかにすることを目的に、学習者コーパスと母語話者コーパスの分析を行った。その結果、「小さい」を

中心とした7語と、「大きい」を中心とした10語の基本形容詞が類義関係にあることが分かった。

●ポスター発表（上記5件を含む27件）

6. 日本語教師の教室活動は、どこまでコミュニケーションか

中川良雄・上野山愛弥・鹿内薫（京都外国語大学）

昨今の言語教育では、従来の教師主導型から学習者主体型の教育方法へと移行し、学習者のコミュニケーション能力を向上させるための工夫も様々になされつつある。しかし実際に教師が用いている教授スタイルは未だ教師主導型の旧態然たるものであることが懸念される。本研究では、日本語教師を対象に、それぞれの教室活動をどの程度用いているか調査し、教師の用いる教室活動の実態を探った。その結果、日本語教師の用いている教室活動は、未だ教師主導型で、学習者中心のスタイルには移行していないことが明らかになった。

7. 日本語学習を必要としない留学生の日本語学習動機—ブラジル人留学生を事例として—

山方純子（神田外語大学大学院）・井上正子（芝浦工業大学）

英語による単位取得が可能な大学（院）では、日本語を必要としない留学生が増加している。彼らの日本語学習動機を明らかにするために、卒業要件ではないが、日本語クラスを履修したブラジル人留学生8名を対象に、インタビューを行った。その結果、日本語学習のきっかけは多様であったが、8名中7名が日本での日本語学習経験を通して、さらに学習意欲を高め、帰国後の学習継続を考えていることがわかった。彼らの意識やニーズを理解することで、日本語の履修を必要としない環境にいる留学生の日本語学習の助けとなる仕掛け作りの一助としたい。

8. 「筆タッチ」の効果的活用—「表記」の授業で学生の能動的な学習を促すために—

三宅祐司・久野かおる・中林律子・波村慎太郎（東京福祉大学）

近年、当校においても非漢字圏の学生が増え、彼らの多くが漢字学習に困難を感じている。当校では入学後、半年以内に日本事情科目で毛筆を使用した書写の授業を行い、漢字に親しみ、意欲的に学べるよう試みてきた。実際に、書写の授業では学生たちは積極的・自主的に漢字を書く。そこで、「表記」の授業で、ホワイトボード上に筆で字を書くことのできる「筆タッチ」を用いた活動を継続的に実施した。学生たちはこの授業に主体的に参加し、字形や、「とめ・はね・はらい」、画数をより意識するようになった。「筆タッチ」を用いた書写の活動が、学生たちの漢字に対する学習意欲を高め、能動的な学習を促す効果があるのか検討する。

9. 内容理解を目的とした読解過程でのストラテジー使用—日本語中上級学習者を対象に—

田川麻央（明海大学）

文章の内容を理解するには、1文レベルの理解、文と文や段落と段落の関係を理解していくボトムアップ処理とともに、文章構造の知識を使ってトップダウン的に理解していく必要がある。本発表は、中国語を母語とする日本語中・上級学習者を対象に、内容理解を目的に日本語で文章を読む過程で、どのようなストラテジーを使用しているか、またどのような難しさがあるのかについて探った。文章の構造に注目したストラテジーの使用が理解の質に影響していることが示唆された。

10. 「いいえ、けっこうです」は失礼か—日本語教科書分析と日本語学習者の意見—

辰巳委子（白鳳短期大学）

国内での日本語学習者の社会的立場の変化に伴い、日本語母語話者とのコミュニケーションの有り様が多様化している。したがって、日本語学習者に求められるコミュニケーション能力も変わりつつある。本研究では、初級レベルの日本語学習者でも心証を悪くしない断り方を検証しようと試みた。そこで待遇コミュニケーションにおける申し出表現の断り方に着目し、初級レベルの日本語教科書に提示されている断り表現「いいえ、けっこうです」を多角的に分析し、日本語学習者が持つ、この表現に対する印象や使用する際の考えを調査し、考察する。

11. 中上級学習者の適切な語句の選択と使用—タスク活動でのインタラクションを通じた学び—

駒田朋子（南山大学）

中級日本語授業で行ったタスク活動において、2人の学習者について、使用する語句・文法の正確性が上がつ

ていたことを駒田・伊東・井手(2016)で報告したが、このタスク活動の録音・文字化資料をさらに観察したところ、言いたい内容を表す適切な語句を新たに知りそれを使用するようになっている学習者があることが分かった。その学習者たちは活動開始時のタスク解答に新しい内容を付け加えて活動終了時にその解答を発表しており、他の学習者とのインタラクションを通じてその新しい内容を表す語句を使えるようになっている。しかし一方で訂正フィードバックがなされているにも関わらず適切な語句の使用に至らなかった例も見られた。

12. 授業準備にまつわる数字を探る－データに基づいたコース運営を目指して－

橋本洋輔（国際教養大学）、中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・野村愛（首都大学東京）・布尾勝一郎（佐賀大学）・齊藤真美（アルバータ州教育省）

教員の仕事は第一に授業であるが、授業を円滑に行うための授業準備については、それが業務として認められるか否かは明言されてこなかったように思う。しかし、近年、労働基準監督署が大手学習塾に対し、授業準備等を業務と認め、賃金未払いの是正を勧告したこと等から、授業準備が賃金の発生する業務の一環であることは否定できない社会状況となりつつある。ここで問題になるのは、では、個人の教師が何をどこまで準備するのが良いかというコース運営上の問題である。そこで本発表では、各種データを根拠にした上で、日本語教師の授業準備時間は何のためにどの程度必要なのかを検討し、議論の契機としたい。

13. キャリア形成支援に関する基礎調査－留学生のための教材開発に向けて－

渋谷博子・中井陽子・菅長理恵（東京外国語大学）

留学生のキャリア形成支援教材を開発するにあたり、(1)キャリア形成支援教材、(2)ビジネス日本語教材、(3)キャリア形成支援を目的とした授業実践報告を分析した。これらの分析結果から、留学生対象の教材の多くがビジネス日本語を扱ったものであり、就職に限らず、長期的視野から自身のキャリアを考えさせるような教材があまり見られないことが明らかになった。このことから、留学生が大学入学後の早い段階から自身のキャリアを意識し、日本での就職を含め、多様な働き方を選択していけるように支援するための教材を開発することの重要性を提案する。

14. 学部留学生のためのメタ認知を活用した読解教材開発

福島智子・藤田裕子・白頭宏美・三宅若菜・鈴木理子・梅岡巳香（桜美林大学）

大学に入ると文章を読むことが大幅に増え、自分の力で必要な内容を取捨選択しながら、理解していくことが求められるが、学部留学生が外国語である日本語でそれを行うのは簡単ではない。そこで筆者らは、学部留学生を対象としたメタ認知を活用した読解教材を作成することにした。メタ認知を活用した読み方ができるようになれば、自分の学習プロセス全体の流れを把握し、コントロールすることができる。本教材では、読む目的を意識したり、読みながら自分の読み方を分析したり、問題点があったらどうするか考えたり、読んだ後で理解度を確認したりする練習をする。本発表では、開発中の教材を紹介し、試用例を報告する。

15. 日本語学習アドバイザー育成をめざしたコースの可能性と課題：履修者と現職アドバイザーの比較を通して

木下直子・トンプソン美恵子・毛利貴美・尹智鉉（早稲田大学）

2016 年度より早稲田大学グローバルエデュケーションセンターにおいて、日本語教育学／マルチリテラシー副専攻科目として「日本語学習アドバイジング」を開講しているが、そのねらいの1つに日本語教育研究センター「わせだ日本語サポート」支援スタッフ（日本語学習アドバイザー）の育成がある。本発表では、本コースの履修生と支援スタッフ（経験者・新規スタッフ）の3者、計9名を対象にインタビューを行い、学習者による相談事例への対応について比較・分析した結果を報告するとともに、日本語学習アドバイザーの育成に必要な事柄について提案する。

16. 非漢字圏理工系研究留学生の語彙修得の実態に合わせた漢字シラバスの検討

笠原（竹田）ゆう子・中嶋めぐみ・三好理英子・濱野哲子（電気通信大学）

漢字教育においては、「語彙先習」、つまり、習得済みの語彙の漢字を学習することが漢字学習の負担を軽減させると言われている。理工系大学院で学ぶ非漢字圏学習者の場合、初級レベルの日本語学習を終えたとしても、初級語彙が完全には身につけておらず、初級以降に学習を継続している場合であっても、研究室の言語的環境、

時間的制約から、習得語彙数は飛躍的には伸びない。このような学習者に継続して漢字学習に取り組ませることを目的に、彼らの語彙習得の実情を考慮した漢字シラバスを検討した。本発表では、日本語学習をゼロからはじめた場合、最長7学期間で700字が学習できるよう、レベルを7段階に設定したシラバスについて報告する。

17. 仙台在住の留学生のための日本語教材開発

堀田智子（東北大学大学院）・菅谷奈津恵（東北大学）

近年、地域における日本語教育への注目が益々集まっており、各地域で多種多様な教材が公開されている。しかし東北地方の日本語教育においては、在住地域に根差した教材は十分だと言えない。発表者らは、日本語学習を通じて、仙台在住の外国人、特にA1/A2レベル（CEFR）の留学生が、仙台に親しみ、より豊かな日常生活を送れることを目的とした教材開発を進めている。本発表では、教材作成に先立ち行ったアンケートの調査結果を報告し、本教材の位置づけ、今後の課題などについて議論する。

18. ディクトグロスの話し合いによる再構築文に見られる文法項目

堀恵子（東洋大学）

初級教科書を終了した3名のクラスにおいてディクトグロスを実施し、はじめに個人が再構築したテキストと、3名の話し合いの後のテキストに現れた文法を具体的に比較した。その結果、元の3つのテキストのうち、より難しい、より後から導入される文法項目を採用する傾向があること、だれのテキストにも現れなかった接続詞や語が時には現れることも見られた。一方、実施した7回のうち2回は2名のみの話し合いとなったが、文法項目は2名の元テキストからバランスよく採用され、クラスメートへの配慮が観察された。より難しい文法を使って読み上げ文に近づけようとする意識と、少人数では人間関係への配慮がより強く働くことが示唆された。

19. 中級クラス口頭表現演習における演劇活動の報告

宮原温子（目白大学）

中級クラスの口頭表現演習において、6週間に渡って演劇活動を行った。学習者は「観客にストーリーをわかってもらえる」を活動の目標とし、台本作成から発表にかけての一連の活動を行った。演技上の会話はもとより、活動を通して学生同士、また学生と教師とのやりとりが盛んに行われ、口頭表現能力が向上することを期待したものである。活動前アンケート、活動後アンケート、フィールドノートの記録、台本、発表の分析によって、この活動の意義と今後の課題を示す。

20. 授業内多読活動に関する自己評価の分析

佐々木良造（秋田大学）

発表者は2016年4月から7月にかけて中級・上級の交換留学生を対象とした授業内多読活動を実施した。本発表では、授業の概要を紹介すると共に、当該授業参加者への自己評価アンケートの分析結果を述べる。アンケートの自由記述を分析した結果、学習者の言語面においては、先行研究と同様の結果が得られたのに加え、話す・聞く能力についても向上したという自己評価を下していることがわかった。情意面においては、肯定的な読書態度、日本語学習へのモチベーションの増加だけでなく、対人関係の構築、精神的安定の保持、自己肯定感の獲得といった言語学習以外の面でも多読の授業を評価していることがわかった。

21. 問題解決能力の育成を目指した日本語ボランティア養成講座：受講者の学びに着目して

大河内瞳（立命館大学）・尾形文（兵庫日本語ボランティアネットワーク）・神夏磯晴香（大阪文化国際学校）

本発表では、日本語ボランティア養成講座での実践を報告する。本講座は地域の日本語教室で支援するボランティアの問題解決能力の育成を目指して、週1回、1回3時間、全10回実施した。9人のボランティアが受講し、グループワークを通して自身の日本語教室での活動を振り返ったり、問題点とその解決策を検討したりした。各回の講座終了時に記入してもらった振り返りシートから、受講者は、日本語教室に参加する学習者の自律を促す学習の重要性や、問題解決を行う場合結論を保留することの大切さを学んでいることがわかった。また、講義形式ではなく、グループワークを中心とした講座であったことで、仲間と学び合う意義を見出している人も多くいた。

22. 中国人日本語学習者における「カラ」と「カラノ」の容認度と使用実態に関する研究ー日本語母語話者と比較した調査分析を通してー

楊雯燭（九州大学大学院）

『YUK タグ付き中国人日本語学習者作文コーパス 2015』Ver. 5 には、中国人日本語学習者は「カラ」と「カラノ」の混同現象が見られる。このような混同現象は他の中国人日本語学習者にも見られるのだろうか。また、中国人日本語学習者に見られる混同現象は日本語母語話者の使用状況とどのような違いを見せるのだろうか。そのような問いに答えるために、本研究は日本語母語話者、中国人日本語学習者を対象に、調査（容認度と文法判断テスト）を実施し、その結果を考察していく。それにより、中国人日本語学習者に対する日本語の「カラ」と「カラノ」の使い分けに関する有効な教授法の提示に繋がるであろう。

23. 介護のオノマトペは自然習得が可能なのかーEPA 候補者へのヒアリングから探るー

神村初美（首都大学東京）

介護現場ではオノマトペが多用される。しかし、従来の日本語教育ではあまり扱われず、EPA 候補者の場合、就労直前の日本語研修においてもテキスト上の偶発的な場合に留まっている。一方、オノマトペ多用の現場事情から自然習得される可能性もある。しかし、いわゆる介護のオノマトペの自然習得等に関する研究は管見の限り見られない。そこで、外国人介護人材の介護のオノマトペの習得状況につき、EPA 候補者へのヒアリングを通して探った。結果、想定される場面や動作によって使用されるタイプは習得しやすいこと、行為の目的によって使用されるタイプは習得が難しいこと、あいまいな理解状態で使用している場合もあること、が考察された。

24. 内容を重視した日本語授業の試みー東日本大震災をトピックとしてー

山森理恵（横浜国立大学）

学部生を主たる対象とした上級の日本語授業において、東日本大震災をトピックとして行った日本語授業の実践について報告する。トピックに関連した資料や書籍の購読、ビデオの視聴を行い、それをもとに意見を述べ、関連するテーマについて発表を行うことで、日本語能力の向上を目指した。また、これらの活動を通して、東日本大震災の被災地でどういうことが起きていたか、あるいは起きているかを知り、そこに存在する人々に関心を持ち、問題点や解決方法を探ることで、今後受講生が社会を担う一員として必要となるような他者を理解する力や思考力を養うことを目指した。その成果を学生のコメントシートをもとに検討する。

25. 日本語による表現に起因する数学講義動画視聴の困難点ー中国人理工系留学生に対する調査ー

滝口浩由（早稲田大学大学院）

日本の大学（学部）での教育の中心は講義であり、外国人留学生にはそれを理解するだけの日本語能力が求められる。理工系留学生の場合、必須である数学講義に慣れておくことが有効であろう。しかし、入学前にそれを身に付けられる環境にある留学生は限られている。そこで筆者は数学講義動画作成を前提とし、学部入学前の理工系留学生が日本人学生向けの数学講義動画を視聴した際に生じる困難点を調査した。その結果、日本語による表現に起因する困難点として（Ⅰ）「式や記号の読み方が分からない」（Ⅱ）「音声は何を表すか分からない」（Ⅲ）「日本語と母語とで漢字が異なる」（Ⅳ）「専門用語」が分からない」の4点があることが明らかになった。

26. 年少者学習者に対する自然災害をテーマとした日本語授業の実践ー日本語能力、言語文化背景、認知の発達段階に応じた取り組みー

河野あかね（つくばインターナショナルスクール）

東日本大震災から早6年が経ち、年少者日本語学習者の中には、震災後に誕生したり来日したりした者も増えてきた。一方で、度重なる余震や熊本地震、関東・東北豪雨による水害なども発生しており、やはり日本が自然災害大国であることを認識する場面も引き続き多々生じている。そのため、日本での生活において、自然災害について知識を得たり考えたりすることは非常に重要なことである。そこで、日本語能力や言語文化背景、認知の発達段階がそれぞれ異なる年少者日本語学習者に対し、様々な方法で自然災害をテーマとする日本語授業に取り組んできた。実践により、日本の自然災害に関する知識の習得と日本語表現に関する学びや気づきが見られた。

27. 雑談のコツを考える

才田いずみ（東北大学）

発表者は、雑談は人間関係作りに影響を与える大変重要な言語行動である、と考えている。学習者が目標言語社会において人脈を広げ、その中に自分の居場所を確保するには、傾聴に値する有益な語るべき内容を持つか、社会や他人に役立つ有益な内容でなくても、他者に聞かせる価値のある話が出来るかである。前者は非常にハードルが高いので、後者を追究しているのだが、教材開発のために収集した雑談データの分析からこれまでに得た知見をもとに、雑談を上手に進めるためのコツについて考える。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

28. 主体的に考える力を重視した専門教育の試みー大学の日本語教育科目における文献講読からレポート課題までー

鎌田美千子（宇都宮大学）

アカデミックな文章や発表にまだ不慣れな段階では、文献に書かれていることを自身の考えとして述べてしまうケースや構成・論理展開に不備があるケースが散見される。こうした問題に対しては多面的なアプローチが考えられるが、本研究では、専門教育の立場から、各自が主体的に考える課題を複数組み込んだ授業実践を試みた。具体的には、学部学生を対象とした日本語教育に関する演習科目において、1) 文献講読、2) 教材作成、3) 発表とフィードバック、4) レポート課題の四つの段階を設けて展開した。一連の取り組みから、専門知識を意識させる課題設定が洞察的な学びにつながり、上述した問題が改善されることが示唆された。

29. 大学教員と学生を対象とした盗用判断課題ー予備的調査ー

菅谷奈津恵（東北大学）

論文やレポートで間接引用を行う場合は、自分の言葉で参考資料の内容を言い換えなければならない。だが、どの程度の言い換えが必要かは、あまり議論がされておらず、指導をする際も悩みの種となっている。そこで、本研究では、間接引用の適切性についての認識を探るために、大学教員7名、日本人大学生21名、留学生12名を対象に質問紙調査を行った。質問紙では、原文表現からの借用程度と出典表記の有無が異なる4つの引用文を提示し、盗用かどうかを尋ねた。分析の結果、出典無記載に対しては、どの群も盗用と判断する回答が多いことがわかった。一方、借用程度に関しては、判断にばらつきが見られることがわかった。

30. 韓国人学習者のクリティカル・ライティングにおけるスピーチレベルシフト

柳東汶・木下直子・SHEPPARD, Chris（早稲田大学大学院）

本研究は中上級レベルの韓国人日本語学習者のクリティカル・ライティングにおいて、その文末のスピーチレベルシフトが起こる現象について考察したものである。日本語や韓国語のように文末のスピーチレベルが敬体・常体と分類される言語は、そのスピーチレベルが文章・談話全体において統一されることを基本とする。しかし、本研究で韓国人学習者31名を対象として行った、意見文を作成するタスク調査の結果では、日本語・韓国語を問わず、統一されていないケースが確認された。分析した結果、意見や記述を詳述し始める部分、意見と記述の文の境目などのところでスピーチレベルシフトが起こっていることが明らかになった。

31. ICTを利用した専門語彙習得の試み

八嶋康裕（国際交流基金関西国際センター）

企業内研修の中で外国人研修生を対象に実施した、ICTを利用した専門語彙習得の試みについて報告する。国内企業において日本語初級レベルの外国人研修生を招聘し行われた半年間の研修で、業務に必要となる専門語彙の習得が大きな課題となった。そこで日本語指導の一環として「専門語彙ワードブック」を作成し、研修生の業務遂行の一助とした。本発表では、作成の経緯や、オンラインストレージやウェブアプリケーションを使用したワードブックの作成方法と活用例を具体的に提示するとともに、学習支援という視点から教師の役割について考察する。

32. 日本語クラスにおける「俳句ワークショップ」の実践報告と考察ー俳句が学習者にもたらすものと教師にできることー

相場いぶき（ディキンソン大学）

俳句はその型のシンプルさと内容の深さから、日本語教育に取り入れられることが多い。5・7・5の定型と季語という制約があるにもかかわらず、俳句が学習者にもたらすものは、文化の理解、言語スキルの向上、創造力の育成など、多岐にわたる。一方、筆者が行ったアンケートからは、俳句を授業に取り入れることに対する教師の悩みもうかがえた。本研究では、筆者がこれまでにに行った「俳句ワークショップ」の実践内容を、1) 総合型 2) 創作型 3) 鑑賞型の三つに分けて報告し、俳句が学習者にもたらすものと教師にできることを考察する。さらに、俳句を日本語教育に取り入れる際、目的を明確にすることの重要性にも言及する。

●ポスター発表（上記5件を含む27件）

33. FileMaker を用いた漢字リスト作成方法ー留学生に対する数学教育における専門用語の漢字指導ー

青木由香利・北村よう（東海大学）

理工系学部に進学する留学生に対して数学の指導は不可欠であり、内容理解度とともに、専門用語の理解度をあげることは重要である。しかしながら、言語指導の専門ではない講師にとって、専門用語の指導には多くの困難がある。特に、学生一人一人の漢字の習得状況には大きな違いがあり、それを把握することは不可欠であるが、進捗状況の確認は簡単ではない。そこで本研究では、FileMaker を使用して開発された漢字学習リストを用いることで、日本語教育者と数学教育者の連携を図り、語学教育専門ではない教育者でも、簡単かつ効率的に漢字を指導できる方法を示すものである。ここではFileMaker でのリストの作成方法や使い方、利点などをまとめ、今後の数学教育に役立てていく方法を示す。

34. 協働で学ぶ教室環境を目指した教室活動の再考ー初級学習者の発話調査からー

杉本美穂・藤田百子（早稲田大学）

本調査の調査協力者は、文型シラバスに拠る主教材を軸にした授業デザインの下で学習している。このような学習環境で、協働で学ぶ教室環境の構築を目的に「今日の一言」「日直」という教室活動を設け、そこに現れる学習者の発話を調査した。その結果、この教室活動の中では、話し手が聞き手に発話意図を伝えるための方略が見られ、聞き手側からもこれに反応していることがわかった。しかし一方で、学習者や教師への負担、学習項目との関連など、授業をデザインする上での課題が残った。このような調査結果を踏まえ、学習者にとってより効果的な教室活動を再考した。

35. 全学を対象とした初年次レポート作成指導から見えてきた日本語教師の新たな役割ー学部を超えて学生の学びを考える場作りに向けて

藤浦五月・宇野聖子・堀井恵子（武蔵野大学）

本発表は、初年次でのレポートの書き方指導において、「学部を超えて学生の学びを考える場作り」という日本語教師が担う新たな役割について議論するものである。本実践では、全学約2000名を対象に日本語教師がレポートの書き方指導を行った。同質の教育機会を保証するため教員が連携し、最終成果物として約2500字のレポートを各学生が執筆した。レポートテーマは統一せず、個別の興味関心から自分の力で考えながら問題を掘り下げていく過程を重視した。本発表では、参考文献の書き方等の全学の取り組みから「形式面でのつながり」について、そして個別テーマと専門に関する分析結果から「専門性と好奇心の橋渡し」についての報告を行う。

36. ピア・ラーニングによる読解文要約の試み

渡辺民江・上田美紀（中部大学）

日本語教育においてもピア・ラーニングの有効性が示され、様々な実践が試みられている。本実践は、中上級日本語読解授業での読解文要約の課題に、ピア・ラーニングを取り入れたものである。授業では、学習者各自に要約文を作成させた後、グループごとに話し合い、新たにグループとしての要約文をまとめさせた。実践後にアンケート調査を行い、ピア・ラーニングの際の具体的な手順、メンバーからの学びの内容等を把握した。さらに、本実践に対する感想及び評価についての記述から、ピア・ラーニングの可能性と課題を探った。

37. 外国出身保護者支援サイト「連絡帳を書こう！」の運用と改善について

内海由美子（山形大学）・澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）・角南北斗（フリーランス）

幼稚園・保育園の連絡帳は、家庭と園とのやりとりの手段であるだけでなく、信頼関係を築き協力して子育てするためにも重要な役割を果たしている。そこで、読み書きに課題を抱えつつも、連絡帳を書きたいというニーズのある外国出身保護者を支援するために、連絡帳の書き方を示したサイト「幼稚園・保育園の連絡帳を書こう！」を作成し2016年3月に公開した（<http://www.renrakucho.net/>）。本発表では、その運用から浮かび上がってきた課題（内容面、技術面、周知方法等）とその対応策の案を提示し、参加者とディスカッションしたい。

38. 異なるディスカッション課題における学習者間のやりとりの比較－テーマ学習の深化という観点から－

工藤嘉名子・大津友美（東京外国語大学）

本研究では、日本社会・日本文化に関するテーマ学習後のディスカッションの中から、賛否両論型と問題解決型という二つの異なるタイプのディスカッションを取り上げ、テーマ学習の深化という観点から学習者間のやりとりを比較した。賛否両論型のディスカッションでは、①教科書にはない新たな視点を持ち出し多角的に議論する、②自分とは異なる意見を相手の立場に立って考える、ということによってテーマ学習が深化することがうかがえた。一方、問題解決型では、①発話内のキーワードからアイデアが誘発される、②誘発されたアイデアを関連づけながら協働で提案を具体化する、ということによりテーマ学習が深化することがうかがえた。

39. 「私のこと」を創り出す「防災を学ぼう」の実践報告

松本明香（東京立正短期大学）

東日本大震災発生以降、各教育機関では留学生に対する防災教育が行われている。これらは、自国では災害の経験はほとんどない留学生達に、物理的・心的準備を促す効果を生んでいる。本発表では、防災の知識を教師から与えられるのではなく、学生達が自ら調査し、発表する授業「防災を学ぼう」という日本事情クラスの紹介を行う。課題の一つ、「1日前インタビュー」では、ネパール人学生が東京ディズニーランドで東日本大震災を経験した友人にインタビューを行い、その友人に共感する生々しい「声」、そしてこの課題から「私のこと」を創り出す姿が見られた。発表では、本実践を通して観察された留学生の「自分なりの意味」について議論したい。

40. ポッドキャストを利用した反転授業の試み

武田知子（国際基督教大学）

事前に課題を行い、クラスでは問題解決学習に取り組む反転授業が注目を集めている。本発表では、ポッドキャストで公開されているラジオ番組を用いた上級日本語クラスでの反転授業の試みを報告する。学生自ら選んだ番組を全員が授業前に聞き、クラスでは内容についてディスカッションを行なった。授業後のアンケートでは、「聴解力、語彙・表現力が伸びた」、「日本社会についての知識」が増えたという意見があり、効果を実感している様子が見られた。一方、検索機能がないため、番組を選びにくかったとの指摘もあった。発表では、参加者と日本語教育におけるポッドキャストの活用法について意見交換を行いたいと考えている。

41. 実社会につながる選択授業－留学生が行うエコ活動と環境学習－

林田なぎ（早稲田文化館）

2016年4月から12月までの3学期9か月間、筆者が勤務する日本語学校のカリキュラムにある週2時間（90分）の選択授業のひとつ、「社会参画」クラスの中で取り組んだ環境学習とエコ活動に関する実践報告と成果についての発表である。区が運営する環境学習室の協力のもとに行った地域の自然や環境についての学習と並行し、身近なことから始められるエコ活動を展開、校内エコキャップ回収キャンペーンや、環境保護啓発ポスターの作成を行った。日本語学校留学生が行った環境保護、校内から始める美化活動が身近な地域社会へもつながり、留学生自身のみならず、地域の日本人においても日本語学校や留学生に対する意識の変化が見られたことは意義深い。

42. 教室外学習用 web 教材の作成と配信－IT 知識・時間がない教師の LMS 利用と協働－

平野宏子・渋谷博子・清水由貴子（東京外国語大学）・大西昭夫（VERSION2）

本発表では、IT 知識ゼロの日本語教師 3 名が、学習管理システム Glexa を用いて、漢字や文法の穴埋め・マ

ッティング問題、漢字の動画フラッシュカード、採点機能をもつ教材を2週間程度で作成し、配信できた過程を紹介する。2016年11月末の学期末試験範囲までの数週間という短期間の配信であったが、場所を問わず学習できる手軽さや、学習後すぐに自己チェックができることから、学生は事後アンケート調査で本システムを利用した学習が便利であり、今後も様々なコンテンツの配信を望むと答えた。発表では、主に英語教育で利用されている本システムの日本語教育への導入と課題についても紹介する。

43. 問題解決能力の育成を目指した日本語ボランティアのための教材作成

岡田裕子（桃山学院大学）・大河内瞳（立命館大学）・尾形文（神戸松蔭女子学院大学）

本発表では、日本語ボランティア養成講座で用いるための教材作成への取り組みについて報告する。本教材は問題解決能力とクラス形式に対応できる実践力の育成を目的とした。手順としては、まず21世紀型スキルを教材コンセプトの基盤に据え、キーワードを抽出した。次に、キーワードの考え方を学ぶためにはどのような活動が必要かを考え、教材の構成を検討した上で、暫定版を作成した。さらに、日本語ボランティア3名に暫定版へのコメントをもらい、それを基に改訂をして最終版とした。本教材を用いた講座に参加した受講者の感想からは、本教材の目的である問題解決に向けた考え方を自分なりに解釈しある程度受け入れている様子がうかがえた。

44. 日本語学習者に役に立つ語は何かー「やさしい日本語」書き換えリストの分析を通してー

金庭久美子（立教大学）・川村よし子（東京国際大学）・山森理恵（東海大学）・小林秀和（筑波大学学部生）

本研究では、やさしい日本語への自動書き換えシステムの構築を目指している。単語レベルでやさしい語に置き換えているが、初級語彙（旧日本語能力試験3,4級）だけではうまく説明できないものがある。そこで今回、書き換えリストをもとに、初級語彙による説明が困難な語を抽出した。それらの語に対する書き換えは、どのような語を用いれば説明可能となるのか分析した。その結果、語の説明には『分類語彙表』（1964, 2004）の6つの大項目のうち、「抽象的關係」と「人間活動ー精神および行為」に属する語が必要なのことがわかった。これらの語は、抽象概念を説明するには不可欠であり、初級語彙の次に提示すべき語として重要だと考えられる。

45. 日本語母語話者と非母語話者の混成ビジネス日本語クラスの実践

菅陽子（東北大学）・松澤幸太郎（外務省）

本報告では、報告者の勤務する東北大学会計大学院国際会計政策コース(IGSAP)の日本語授業に、日本語非母語話者である留学生とともに、母語話者である社会人学生が出席した際の実例を紹介し、新しい日本語教育のあり方を検討する。報告者の授業では、母語話者である社会人学生が出席し、多様な国籍や文化的背景を持つ人々が共に仕事をする際に生じる問題点に関し検討・討議する等の授業を行った。これを踏まえ本報告では、第一にIGSAPにおける発表者の授業体制と授業内容に関する取り組みを説明する。第二にこのような授業の体制と内容を踏まえ、母語話者である社会人学生に参加することの意義・効果等に関して検討し、新しい日本語教育に係る提言をする。

46. 学習者はどのように教師から語彙を引き出すかー正確さ重視の初級日本語の授業の場合ー

加藤伸彦（立命館大学）

本発表の目的は学習者が教師から語彙を引き出す方法を記述し分類を試みることである。分析対象は筆者が担当した語彙・文法の正確さを重視する初級レベルの授業で収集した音声データである。本発表では、まず、学習者が語彙の引き出す方法を直接的な方法と間接的な方法とに分ける。次に、直接的な方法として①補充疑問文による質問、②平叙文による言い換え要求、③言いさしによる誘発の3分類を提案する。続いて、間接的な方法として④真偽疑問文による質問、⑤選択疑問文による質問、⑥平叙文による確認要求の3分類を提案する。

47. 語彙学習および指導を目的とした多義語の意味分析ー動詞「出る」を例にー

岩出雪乃（京都外国語大学大学院）

本研究は日本語教育において有用な意味記述を行うことを目的とし、多義動詞「出る」の意味を認知言語学の理論を用いて分析した。本研究では、松本（2009）による「概念的的中心性」を持つ別義を中心義とし、別義認定の方法及び関連に関して、メタファー、メトニミー、シネクドキによる区分を用いて「出る」の意味分析を行った。その結果「出る」の意味は「別義1：意志のある動作主体または無情物が、限定された空間の内や境界部分

から、その空間の外側に移動する」を中心義とし、その他 10 の別へメタファーないしメトニミーにより、意味が派生していることを示した。また別義 3、5、6、7 からさらに意味が派生していることを明らかにした。

48. 意見文の説得力に関わる要因一言語とタスク難易度との関係一

夏蕊・木下直子・SHEPARD, Chris (早稲田大学大学院)

批判的思考力(説得力)は 21 世紀型スキルとして不可欠である(楠見・道田 2015・2016、P. グリフィンほか 2014)。本発表では、説得力と母語、タスクの難易度の関係を明らかにすることを目的とする。2016 年 8 月に中上級の中国人日本語学習者 30 名を対象に意見文を書いてもらう調査を行った。言語(母語・日本語)とタスクの難易度(日常的・専門的なテーマ)によって説得力の程度(理由の有無・証拠の有無; マナロほか 2015)を分析したところ、日本語より母語の説得力が高く、易しいタスクほど説得力が高いことが明らかになった。その点を踏まえ、どのように教育を行ったらよいかについて指導案を提案する。

49. 専門講義理解支援のための説明活動一対話を通じた学習者の理解の変容一

近藤行人(名古屋学院大学)・西坂祥平(名古屋大学大学院生)・衣川隆生(名古屋大学)

他者との対話を通して学生自身の解釈を作り上げていくという協働活動を取り入れた実践を行った。この実践では、文脈を異にする他者への説明活動を取り入れ、この過程で講義の内容について理解を深め、講義の内容が「内省としての理解」に達することを目的としている。このため、土質力学に関する講義を聴講し、この内容についてグループワークで理解を確認しあった後、専門分野の異なる文系の大学院生に対して、講義内容を説明してもらった。実践の概要を記述し、学生の説明活動を分析した結果、説明活動を繰り返すことで、講義の概念を学生自身のことばとして解釈し、前には指摘できなかった概念の解釈が説明できたという事例を報告する。

50. ある中級日本語学習者の読解過程の分析

高橋亜紀子(宮城教育大学)

筆者は中級の日本語学習者 1 名を対象にした授業で、学習者が文章を読んで、その設問に答えるという過程を観察した。この過程における筆者と学習者とのやりとりから、学習者がどのような点でつまづいているのか、何を手がかりに理解を深めているのか、そして最終的にどのような理解にいたったのかを分析した。その結果、キーワードなどを手がかりに内容をまとめるなどの積極的な姿勢が見られたものの、単語の認知や未知語、文型・文法などの処理において多くのつまづきが見られた。そのため部分的で表面的な理解にとどまっていることがわかった。

51. ディスレクシアを抱える学習者の日本語習得の様子およびそれに対するチューター指導の実践報告

國友愛珠・橋本洋輔(国際教養大学)

発表者所属先では、学修達成センター(Academic Achievement Center)という施設がある。ここでは学生がチューターとなって、本学学生が学業面での能力を最大限に発揮できるよう、個別学修支援を通してピア・サポートを行う。チュータリングセッションは 1 対 1 で行われ、1 セッション 1 時間が基本である。そこで、2016 年 11 月から 12 月にかけて、ディスレクシアを抱える学習者を担当することになり、日本語の授業で出される課題やテスト勉強のサポートを行った。本発表では、学習者が新出漢字とその読み、意味をそれぞれどう繋げて習得しているのかといった学習過程の様子や、進出語彙を覚える際に効果があったと考えられる音声をともなった学習法などについて報告する。

52. 日本語上級クラスにおける「話す」Can-do 自己評価の実施とその効果

手塚まゆ子(関西大学)

本研究は、日本語上級クラスにおいて「話す」自己評価を実施した結果、学習者が自己の「話す」能力のどのような点に注目し、振り返りを行っているかを考察したものである。自己評価として①CEFR の Can-do statements 話す項目 24 項目と②LMS にアップロードした各自の発表ビデオの視聴を課した。その結果、全体として授業後には Can-do の自己評価は上がったが、半数以上の学習者が、自分の話す能力は進歩したが改善すべき点があると述べた。一方で、発表ビデオに対しては Can-do 項目が反映した評価は見られなかった。このことから、「話す」Can-do 自己評価は学習者にとって効果的なものであると考えられるが、ビデオ視聴による自己評

価との活用方法を見直す必要があると分かった。

53. 日本人学生との合同授業を通した若者ことば指導の実践報告

辻本桜子（滋賀文教短期大学）

日本語教育の現場で教えるのは、通常、日本語の共通語である。しかし、日本語には方言、性差、若者ことばなどバリエーションがある。短大、大学、大学院等、高等教育機関に進学した学習者は、日本人学生との接触が増えるにつれ、日本語のバリエーションに気づく。しかし、これまでのところ、日本語のバリエーションのうち、若者ことばにのみ焦点をあてた実践研究はほとんど見当たらない。本研究は、同じ大学に在学する日本人学生と学習者が合同授業において、それぞれの言語と文化を「教え合い」「学び合う」をテーマにした授業実践のうち、学習者に対する若者ことばについての指導報告を、アンケートやインタビューの結果を含めて行う。

54. サウジアラビア人留学生に対する学習補助と生活サポートの試み

竹内沙於・青木由香利（東海大学）

現在、東海大学に在籍する留学生 780 名の内、第 2 の割合を占めるのはサウジアラビア人学生（108 名）である。しかし、宗教も生活習慣も異なる日本での学生生活に困難を感じる学生は少なくない。そこで、2016 年 9 月より彼らを対象とした①教育補助と②生活補助を提供している。①は成績モニタリングと基礎科目の学習サポート、②はアラビア語とアラブ文化に精通する研究員による生活サポートである。これらの成果の考察を通じ、アラブないしは各国の学生にとってよりアクセスしやすい大学環境づくりに向けた方策を提示する。

【会場案内】

宮城教育大学

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149

<http://www.miyakyo-u.ac.jp/about/campus/ct2.html>

<地下鉄 東西線> 「仙台」駅から「八木山動物公園」行き乗車、「青葉山」駅下車（乗車時間 9 分）

「青葉山」駅「北1出口」から大学正門まで徒歩約7分

「青葉山」駅の「北1出口」から外に出て、歩道を右方向へ進みます。

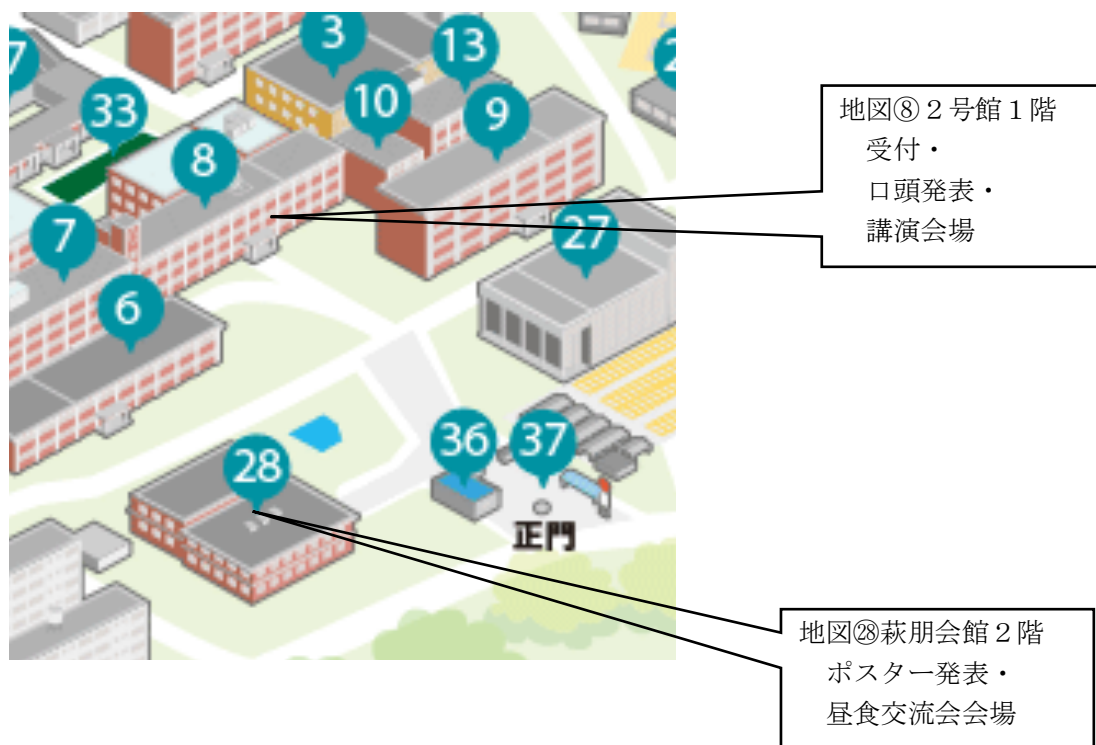
そのまま歩道を歩いて行くと宮城教育大学に到着します（約650m）。



【地下鉄青葉山駅から宮城教育大学までの道順】



【学内の会場位置】



【昼食交流会】

今回も午前のポスター発表終了後、会場の萩朋会館 2階フロアにて昼食交流会を行います。ぜひご参加ください。会費は 1000 円です。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2016 年度会費 (3,000 円) 未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がありましたら、jlem-ml@jlem-sg.org (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会

今回の第 48 回研究会は、2016 年度第 2 回の研究会となります。したがって、2016 年度会費を既に納入いただいている会員の方は会費の納入は不要になります。会場での会費の納入は基本的に受け付けておりませんので、2016 年度会費未納の方、今回新たに会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (上記参照) にご協力ください。